



『トクシマ・アンツァイガー』

第 10 号

徳島 1915 年 6 月 6 日

ドイツの工業と戦争

わが国の工業界では、近年政治の空に雷雲が現れることがまれではないために、突然の戦争勃発を考慮に入れることに慣れ、可能である限りは前もってその準備をしてきたが、大部分を国外や海外の市場を当てにしている工業は戦争の勃発に重大な影響を被った。工業は供給の継続と新たな受注を受ける可能性を奪われたばかりでなく、同時に大きな財政的な損失も生じた。それは敵の支払い禁止と、中立国でも旧世界のすべての経済的に重要な国々を巻き込んだ敵対関係が生じた結果生まれた貿易停滞と経済危機によって引き起こされたのである。

ドイツの経済生活は今年の 8、9 月でほとんど止まってしまった。職員と労働者のほとんどが兵隊に取られ、注文は取り消され、輸出の可能性は妨げられ支払は停止されるという具合である。企業のいくつかは、戦争が

始まってしばらくはまったく活動を停止してしまった。

しかしこれらの分野でもまもなくわれわれの周知の「ドイツ的な組織能力」が姿を現し、短時間で工業は再興し、一般に現状で可能な範囲で以前の軌道に乗った。

機械工場はあらゆる種類の軍需物資供給の注文を受けた。われわれの大きな武器供給業者であるフリードリッヒ・クルップ株式会社、ライン・ヴェストファーレン金属製品製作株式会社、ドイツ武器・弾薬製作株式会社などが今や毎日24時間稼動していることを別にしても、現代戦争の要求はとても多様なので金属加工業はフル操業しており、いくつかの工場では熟練工が不足したので、たくさんの工業労働者が前線から呼び戻され、問題の工場に配属されたほどなのである。

繊維工業と皮革工業は、他の分野のように注文がなくなるということにはなかった。個人需要は大きく後退したとはいえ、こうしたマイナスは間違いなく軍隊の需要の増大によって埋め合わされたからである。

自動車工場と飛行機工場とそれにつながる工業には、国家の大きな委託があるのでおよそ考える必要はない。

そうそのうえ戦争は新たな工業を生み出し、平時には競争力を失っていた企業を再び元気付けた。今日ではガソリンの代わりに自動車などを動かしているベンゾールの生産拡大や電氣的な方法で生産される窒素を思い出してみるがいい。この窒素によりわが国の農業は、従来なかんづくチリから輸入していた硝石へ依存しなくてもよくなるので、その生産は戦後も大変大事な経済的意味を持っている。もう何年も前に採掘を止めたいいくつかの鉱脈もふたたび利用されるようになり、しかもその所有者が得するばかりでなく、外国から買入れなくてもよいので国家の繁栄のためにもなる。ここでは銅とホワイトメタルだけを挙げておこう。

もちろん残念だが戦争の影響をひどく受けている企業がいくつもある。ここに属するのはなによりもいわゆる奢侈製品業のすべての製品である。大きく落ち込んだのは、木工工業・建築業・ビール醸造業・蒸留酒製造業

などである。ここで過剰となった労働力は他の工業部門や農業にたやすく就職することができる。けれども従来これらの産業で動いていた資本は遊休状態となり、それはもちろん無視できない経済的な損失を意味する。

ドイツの海運業などが蒙った損失は別に取り上げなければなるまい。

けれども今日すでに述べておきたいのは、おそらくどちらもわが国にとって間違いない武器による勝利と有利な講和は、現在苦しんでいる多くの国民と経済生活に対し新たに有益な仕事を達成する機会を与えてくれることだろう。

日本の歴史（9）

平家との戦いの主たるリーダーの一人は源頼朝だった。彼は武力により平家を滅ぼした後まもなく、無限の権力を手に入れることができた。彼の居城は鎌倉にありそこに本来の政庁を置いたが、天皇は京都に住み続けた。頼朝は1192年に天皇から将軍つまり征夷大將軍に任じられた。それによって、それまでに実際はすでに手にしていた軍事権限は形式的にも彼に委ねられた。頼朝はあらゆる仕方でも軍事権限の強化を図った。彼は独自の役所を作り、「公卿」といわれる宮廷貴族に並べて「武家」という名の軍人貴族をおいたが、「武家」はもちろん家柄や名望は低いが強大な権力を持っていた。京都と鎌倉の2つの拠点の間には大きな対立が生じた。京都の御所は政治的な営みから離れ学問と芸術を磨いた。それに反して鎌倉では、平時での騎馬戦・格闘技・剣術・弓術が武將や武士の主たる日常業務だった。ふつう武將はものを読むことができたが、せいぜい先祖の英雄的な行為を読むくらいだった。

頼朝の死後ほとんどは幼い子どもが将軍職に付き、実際の政務は代行者である執権が行い、頼朝の姻戚の北条家がこの地位を独占した。もっとも傑出した執権は泰時で実行力と節約の面で際立っていた。泰時は1232年

に、主として新たに設けられた戦闘に従事する御家人の関係を定めたある法律を制定した¹。そうこうするうちにモンゴルが中国と韓国を征服した。貪欲なフビライ・カーン（1260 - 94 年）は、何度も日本に使者を送り朝貢を求めてきた。日本が最後の使者を殺すと、十分とは言えない艦隊を送ったが日本への上陸は阻止された（1274 年）。2 度目のはるかに強力な艦隊も同じくわずかな成果しかあげられず、上陸もできないで帰路の嵐で壊滅した（1281 年）。

ヨーロッパでの日本についての最初の情報はこの時代のものである。ヴェニス人のマルコ・ポーロはフビライ・カーンの宮廷にいたが、彼は日本に対するこの企てについて報告している。もちろん事実とは異なるが、彼はことにこの国の黄金と真珠という富を讃えている。その魅力的な記述とこの国がアジア大陸の東 1,500 マイルにあるという申し立ては、2 世紀後にコロンブスがヨーロッパから西へのコースをとると黄金でいっぱい島に着くという計画を立てる下敷きとなり、彼にアメリカを発見させることになった。

執権統治は長くは続かなかった。モンゴルの攻撃を防いで後、国民は軍隊と将軍の役人のずさんな管理のための莫大な出費によりいっそう大きな困窮に陥り、執権の失脚が切望された。こうした気運に乗って後醍醐天皇は、1331 年に執権の優位から逃れ将軍制を廃止しようとした。最初の試みは失敗し天皇軍は破れ天皇は島流しになった。しかし天皇の支持者は新たな軍勢を集め、ある軍はすでに 2 年後には鎌倉を包囲した。最後の執権である北条高時は当初から寺に逃れ一族はそこで滅びた。鎌倉は包囲した天皇支持派の足利尊氏の軍に攻略され焼け落ちた。

後醍醐天皇はふたたび首都に帰り、しばらくはまったく独力で統治した。けれども天皇は軍が微弱だったのと放漫な統治のため、まもなくみずからの支持者を敵に回すことになった。足利は天皇から京都を奪い天皇を見捨てた。天皇の軍は箱根山で壊滅し、首都は占拠され天皇は比叡の寺に逃れ

1 貞永式目＝御成敗式目

た。天皇の支持者はまもなくまた足利を首都から追い出し、わずかの期間だが天皇は復歸することができた。足利は九州で再起を図った。彼は新しい軍勢を集めて、それを率いて京都に向かって進軍することができた。天皇軍は兵庫で破れ、後醍醐はふたたび比叡に逃れた。足利は京都への立ち入りを禁じ、1336年に神尾天皇²を帝位につけた。後醍醐は足利が立てた天皇を認めなかった。天皇は「朝鮮からの王冠」³をもって大和地方の吉野の地に逃れ、後にその後継者は賀名生^{あのう}に新しい拠点を築いたが、結局後醍醐天皇は相手の支配を阻止することはできなかった。こうして日本は南北朝の二人の天皇に分けられることになった。両王朝は何十年も反目を続けた。これらの争いは大土地所有者やみずからに従う侍に支えられた大名にとっては、いっそう天皇の宗主権から離れかなり自立的になるきっかけとなった。彼らはできるだけ所有を増やそうとし、数え切れないほどの争いをくりかえした。

足利は1338年に将軍となり、この位は1573年まで足利氏のものだった。将軍支配はふたたび新たに整備された。南朝との戦いを続けながら同時に国内の秩序を作ることが不可能なことがはっきりすると、第3代将軍の義満は南朝と講和を結ぶのが得策と考えた。彼は南朝の天皇を退位させ、北朝の天皇が「朝鮮からの王冠」を継ぐようにした。

将来は天皇の位は両朝が交代で継ぐという取り決めが行われた。もちろんこれは後に反古にされることになるが。

つづく

2 第二代光明天皇

3 ふつうは天皇がみずからの権威の象徴としたのは「三種の神器」で、後醍醐天皇もこれにこだわっている。ここで「王冠」が取り上げられているのは、ほとんどの天皇が烏帽子をかぶっているのに、よく引かれるこの天皇の絵が珍しく王冠をかぶっているからで、多分これが朝鮮から贈られたものだったのだろう。

日本のかつての武装について少々

何世紀か前には日本の軍隊制度は、われわれも中世からそうだったように封建法をもとにしていた。軍隊の基盤を成しているのは武士で8万騎はいた。戦士は封臣で領主か大名か直接将軍に属していた。大名は地方の城館や山城に住んでおり（徳島はこの種の古い封主の都の一つである大名のものだった）、同時に駐屯軍の役目を持ち、将軍の要求があれば戦陣に加わらなければならなかった。大名は将軍には無条件で従い命令されればどこにでも出かけた。

ところで一度当時の武装について考えてみたいのだが、日本軍の近代的な武装はチンタオ以前から見られた。

昔の武器は、騎士時代のわれわれと同じような完備した甲冑からなり、絵飾りの付いた兜、眼の部分が開く仮面、馬よろい、弓矢、いろいろな形をした槍や斧槍、朝星棒、鬪斧、さまざまな短剣・長剣が含まれていた。後にはこれにポルトガル人が伝えた銃砲が加わる。近代的な武器を取り入れたので、かつての日本人は剣やサーベルという脇役に特別な価値を与えた！けれども腰に脇役の武器を挿すのが日本では以前はふつうの習慣で、僧や小商人や乞食のように軽蔑されていた民衆（穢多）を除けば、誰もがいつもではないにしても祭りの日や休日、仕事や旅行の際には刀を挿していた。

刃の質に大きな価値があり、われわれの貨幣で4,000～6,000マルクの価値があったようである。技巧を凝らした鍔・鞘・いくつかのその他の飾りなどの高価な装備が、しばしばいっそう値段を引き上げた。こうした武器は家族に受け継がれ、しばしばその工房の高い価値評価は特定の刀鍛冶の名前と結びついていた。それまで軍隊制度の改革に取り組もうとしなかった日本政府は近代になって初めて、中世の軍隊をもつ封建体制はもはや近代的な要請にとって十分でないことに気づいた。1866年に最初のフランスの教練将校が横浜に招かれた。次いで1872年に国民全体の兵役義

務が導入され、その翌年新たな陸軍が組織されるとプロイセンを手本にするようになった。1883年に初めて日本にやってきたドイツの教練将校は、翌年には日本の陸軍全体にわれわれが今もっているようなドイツ風の特徴を浸透させた。

近代的原則による軍隊のこうした新組織によって、言うまでもなくすばらしい古くからの武士の刀も排斥されることになった。フォン・ヤンセン退役陸軍中將は『日本の防衛力』の中で書いている。考えさせられることだが、その他の面ではひどく慎ましい日本の軍政は、この国民の好戦的な感覚ととても緊密に結びついている刀鍛冶作業の歴史的技術の避難所を、古くからの刀鍛冶の姿で開いたのである。この工房は東京の兵器廠にある。

9,000人の労働者が働いている大規模なまったく近代ヨーロッパ的な工場の中に、すすけた壁に囲われた一つの小部屋がある。ここではベルトも旋盤の歯車も蒸気ハンマーも動いていない。若い労働者が小さな暖炉の炭火を煽り、知的な顔立ちの70代の男が大きな絹の袴をはいた古い日本の衣装を身にまとい、頭には神主のような黒い帯の付いた高い烏帽子をかぶって地面に座って働いている。さまざまな古くからの儀式にのっとりて刀の刃を鍛えているのだ。黒塗りの天井には、(悪霊を払うための)独特の形をした白い紙片(御幣^{ごへい})を下げた細い藁縄が飾られているが、これは古くからの刀鍛冶の慣習である。われわれはここで古い日本のある小さな断片を、一風変わった何とも唐突な仕方で新しい時代のさ中に見ることになる。活き活きした古代の断片を保存しようとするこうした尊崇の仕方がどう正当化されるのかを理解するには、1868年以後まで完全な活力を保っている古い日本の刀が何を意味するのかを明らかにしなければならない。人々はそれを、(戦士であるとともに高貴な人でもある)武士の生きた魂と呼んでいる。刀は武士の榮譽と同じく穢れないものでなければならず、刀に曇りが生じた場合は、第二の小刀(脇差)で自殺(切腹)することで拭わなければならない。われわれの次の課題の一つは、日本における自殺(切腹)の本質にいくらかでも近づくことである。

つづく

収容所生活から

われわれの収容所にとってとても嬉しかったのは、先週の土曜日に宣教師のライマース師とシラー師がカトリックと新教の礼拝を行うために来られたことである。2つの式典は荘厳かつ厳粛に進み、両師が好意をもって強調して下さったように、われわれのオーケストラとコーラスはすばらしい成功のために本当に大きな役を果たしてくれた。そのうえライマース師が言うには、自分が行った礼拝で良い音楽を供せたのは6年間で初めてのことだった。師は、コーラスとオーケストラのメンバーすべてにお礼を言うようにと伝言されている。

そのほかにもわれわれの音楽家たちは賞賛の声を浴びた。シュレーダー師は今月の半ばに来ることを伝えたある手紙の中で、自分が行う礼拝の際にまた音楽に協力してほしいと依頼した。われわれの音楽家たちはとても喜んでこの願いを受け入れた。というのも彼らはもちろん礼拝の機会をより美しくすることを喜んだし、同時に訪問者に自分たちの熱心な練習の成果を聴かせるのが嬉しかったからである。

二人の師を讃え来訪に感謝するため、先週の土曜日の礼拝の後にコンサートが予定されていた。しかし残念なことにそれは中止せざるをえなかった。

われわれこそがそのような賞賛を音楽家に贈るべきなのだろうが、日本ではよいドイツ音楽を聞くことはまれで、師たちは間違いなく本当に楽しめただろうから誠に申し訳ないことである。例えばここに来た際にコンサートを聴いたドレンクハーン氏は、自分には「驚きであるばかりでなく、大きな楽しみでもあった」という手紙を寄こしている。いつもお世話になり本当に心から感謝しなければならぬこのような人に、こうした形でささやかな喜びを返せたのはとても嬉しいことである。

さらに同じ手紙でドレンクハーン氏は、この後なお2本のクラリネットと1本のフルートが届くと書いている。好意のこもった楽譜も今後の見通

しを与えてくれた。

われわれのオーケストラは、もうひとり O. K. ヴィレという友にしてパトロンを得た。彼は、われわれの誰もがよく知っている第三海兵大隊楽団の指揮者で、天津から2個の大きな楽譜の包みを送ってくれた。彼にもここで全員の名で深甚な感謝を捧げたい。このようなさまざまなお世話のおかげでわれわれのオーケストラはいっそう改善され、いまからもう、次のコンサートの夕べにはすばらしいプログラムを提供してくれるとお伝えしておこう。

図書室

われわれの収容所図書室には現在215冊のドイツ語の本と14冊の英語の本があり、ありがたいことにとても活発に利用されている。ことによく読まれているのはドイツ語の小説と旅行関係書である。前回、嬉しいことに良い小説が何冊か付け加わったが、まもなくさらに本が送られて来そうである。

力を尽くして読み物を増やそうと『フェルハーゲンスとクレージング月報』の装丁を始めたが、そこで重視されたのはできるだけどの巻にもできるだけ一つの小説がまるごと収まっていることだった。まもなく『若者』『楽しい冊子』『宇宙』『芸術番』などの雑誌が続くことになる。

これらは苦勞して集めたもので、われわれの収容所は一番後にできたので、おそらく支援委員会が集めた本の最初の配分の際には考慮の対象にならなかったのだろう。このような理由からほとんどすべてを私的な収集に頼った。もちろんこの点でもわれわれはかなり遅れていた。というのも収容所外のたいていのドイツ人は、すでに自分の本を支援委員会に送った後だったからである。

それなのにこのようなかなりの数の本を手に入れることができたのは、

そのほとんどが上海の「コンコルディア・クラブ」の寄付のお陰である。そこが一連の雑誌のほかに、図書室から 107 冊を提供してくれたのである。

もちろんその後の寄贈は今少なくなってきたが、この数週間で収集図書は 20 冊以上増えている。

収容所の誰かがまだ、図書室に提供してくれるような本を手元にもっていることもある。本が増えることは大歓迎である。

しばしば言われていることだが、残念だが、本の取り扱いについてはちらほら問題を見かける。できるだけ多く読まれるためにも極力本を大事にし、自分たちのせいで図書の冊数が早々と減っていかないようにすることは、全員のためになることである。

スポーツ

われわれのサッカーチームは熱心に活動している。ほとんど一日おきに緑の芝生に出ている。この季節を、できる限りわれわれのスポーツのために使えるのは嬉しいことだ。というのもまもなく暑さが増して、ゲームをするにはひどく不愉快になるからだ。

まったくサッカーを止めなければならないほど、ひどくならなければよいのだが。ひょっとしたら後日、涼しくなる夕方にゲームをするように設定できるかもしれない。最近ではさまざまなチームのすべてが本当に嬉しいほど進歩している。たがいの協力も順調で、しょっちゅう本当にすばらしいゲームを見ることができる。

残念でならないのは、ゲームの際にひどくたくさんの事故が起きることである。その理由はなによりも、グラウンドの凹凸が激しいことにある。こうした悪条件をできるだけ取除くことは全体の利益になることなので、自分たちでグラウンドを良くしようという提案を改めてしたい。全部のチーム

が参加してくれるのなら、午前になにか作業を行いたい。必要な用具はいつでも借りられるようになっている。

ファイル

われわれの読者が新聞を保存してやすいように、カバーにわれわれの画家のきれいなデッサンの付いたファイルの製作を計画しています。値段は50 銭です。

紙面に余裕がないので、「チンタオのドイツ人とともに」の続きは次回に回します。

チェス・コーナー

(駒の略語 K = キング、D = クイーン、L = ビショップ、
S = ナイト、T = ルーク、B = ポーン)

第 13 問の解答

1. Kc4 - d3 Kc5 - b5
2. Kd3 - d4 詰み あるいは
1. Kc5 - d6 (D.5)
2. Kd3 - c4 詰み
 (De2 - c5) 詰み

第 14 問の解答

1. Lb4 - a5+ Kb5 - ab1
2. La5 - b6 a7+ b6
3. Db3 - a4 詰み あるいは
1. Kb5 + a5
2. Db3 - b7 任意の手
3. Db7 - b4 詰み

第 13 問の正解者はライポルト一等砲兵だった。

第 15 問

白：Kc5, Dh1, Tg2, h3, Ld2, Sf7

黒：Ke4, Ld1, Sh2, Be6

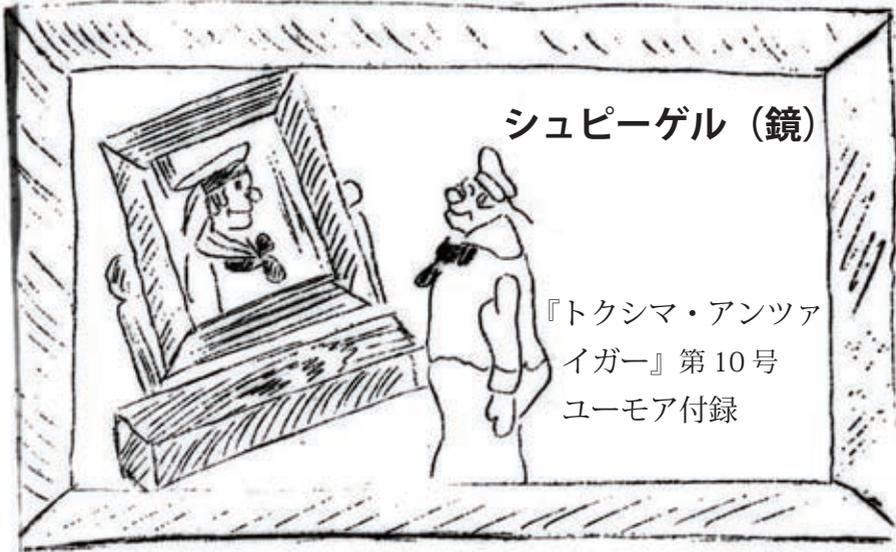
2 手詰め

第 16 問

白：Kd3, Lc8, Se5, f3, Bd7

黒：Kf5, Bg4

2 手詰め



シュピーゲル (鏡)

『トクシマ・アンツァ
イガー』第10号
ユーモア付録

収容所仲間の増加





ハーゲンベックに行こう！



今みんな身の回りを見回している
 ある人にはまるでバカげて見えよう
 なぜならどこもここも
 俘虜収容所だらけだから
 そう百万人近く
 おれたちはもう幸せだ
 そしてドイツの名声と名誉のために
 できればもっと増やしたいくらいだ



俗物の小父さんは日曜日に考える
 今は子どもたちには金がかかる
 そうなのだ昔は日曜には
 グルンヴァルトに行けばよかった
 そしてそこに着くと
 3杯のビールを飲んだ
 もうこの物の高い時代には
 そんなことはできない
 だからみんなは電車に乗って
 俘虜収容所に行き、そして鉄条網越しに





ハーゲンベックの民族ショーを見るのだ
ズールー人、カフィール人、タタール人
タジク人、ヒンズー教徒、人食い人種
ダゲスタン人、トルコ人、アフリカから
の狩猟民

彼らは他の種族と同じく暑い国からと
南洋諸島沿岸からのたくさんの人々だ
カナダの国からはるかの

青い山地の出身者

カフカズ人にセルビア人も
トルキスタン人とチベット人
フランス人、ベルギー人、イギリス人
実際に地面を歩き回っている

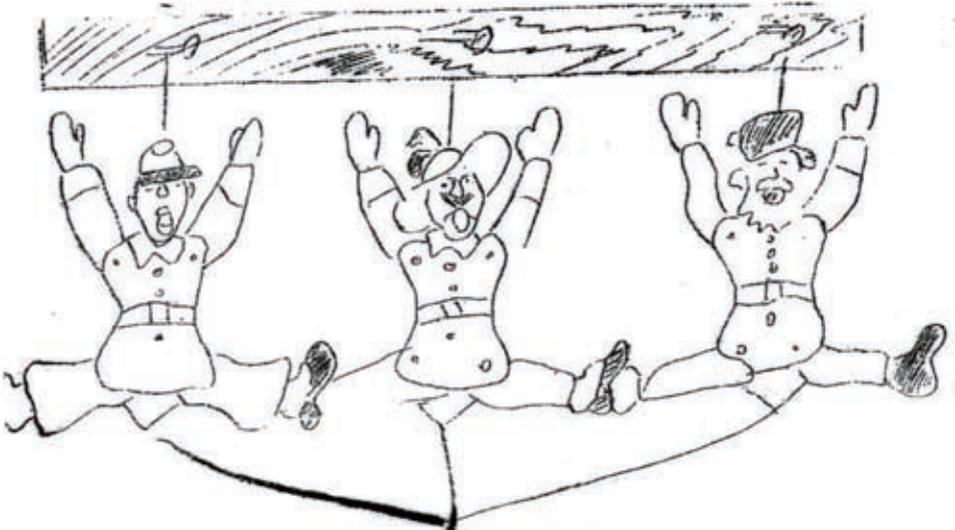
彼らを

ここではわれわれにただで
見せてくれるのだ

だから日曜には長い時間をかけ
家族全員で急ぐのだ
自転車で、電車で、ボロ車で
民族ショーへ、ハーゲンベックへと

一枚の書類が、われわれの編集机の上に飛んできた。それは間違いなく、われわれに勝利の賛歌への腹案を示すはずのものだった。変に思ったのは、各行の間に空いた箇所があることだった。不意にわれわれの心に、まだその行間に読まなければならないものがあるのではという疑いが浮かんた。実際にそこにあったのは、明らかに戦争劇の監督のまったく私的な考えを述べた言葉だった。

ここにその全文を公開し、われわれの側からは「あっそうなんだ」だけを付け加えたい。



われわれの勝利のときは近い！

ここだけの話、われわれはぶん殴られるぞ
敵軍は逃げるであろう！

私がここから逃げられたらいいんだが
もう戻ってこないようにドイツ人を殺してしまえ

この兄弟たち、いやに威勢が良い
今やみんながわれわれの旗へと急いでいる！

残念なことに イタリア人は最後だ
世界全体が熱狂している！

なぜならわれわれは すごい嘘をつけるから！
だから立ち上がれ！ われわれの神聖な

財産のために！
美辞麗句を 叩きつぶせ！ 古い店ざらしの品だ。





聖霊降臨祭コンサート

徳島、1915年5月23日

プログラム

第1部

- | | |
|----------------------------|----------|
| 1. オペラ『ドン・ジョヴァンニ』序曲 | モーツアルト |
| 2. ヴァイオリン協奏曲ニ長調から「カンツォネッタ」 | チャイコフスキー |
| 3. 弦楽三重奏曲から「シチリアーノ」 | ハイドン |
| 4. リクエスト：「パストラル」 | アイヒホルン |
| 5. 結婚セレナーデ | クローゼ |

第2部

- | | |
|------------------------|-------------|
| 6. 万歳、皇帝がやって来る | 自動車行進曲の翻案 |
| 7. オペラ『ファウスト』から「大きな幻想」 | グノー |
| 8. 「あなたの胸で夢を見させて」 | トランペットのための歌 |
| | クラジンスキー |
| 9. 褐色のワルス | クラーア |
| 10. 花の乙女 | ツーステップ |
| | ヴェンリッヒ |

「あなたの胸で夢を見させて」

クラジンスキー

1. もう一度あなたに言いたい
わたしにとってどれほどあなたが愛しいかを
生きている限り
わたしの魂も
朝焼けのように縁取りたい
あなたの心の中の愛を
(リフレイン)
あなたの心を夢見させて
春の夢を見せて
あなたの心を夢見させて
春の夢を見せて
2. 喜んでいようあなたの小屋の前で
金色の夕べの光の中で
明るい森のさ中から
判じ絵飾りの小窓を見よう
このリラの花束をごらん
あなたのほのかな部屋のために摘んだのだ
(リフレイン)
3. 斜面をよぎって歩こう
暗いぶなの道に沿って
森の中は春の静けさ
小鳥の歌はとても愛らしい
耳を澄ましてごらん！広い部屋のように
木から木にささやきが伝わっていく
(リフレイン)

ヘルマン・ダール作詞

「おお聖霊よ、わがもとに来たれ」
メロディー「明けの明星はなんと美しく輝くことか」

1. おお聖霊よ、わがもとに来たれ

わがもとに住み給え

来たれ心の太陽よ！

天の光よ、あなたの光をわがもとに

われに変わる事のない歓びへの力を与えたまえ

太陽、歓び、天上の生活

われわれが祈るときに与えてほしい

われわれは踏み出したとき、あなたのもとに行くのだから！

2. 汝、泉よそこから

たがいに挨拶を交わすすべての知恵が流れ出る

われわれすべてのクリスチャンは和合するので

あなたの真の証拠を教えてくれる慰めを聞かせてくれ

あなたの心と感覚を生み出すことができ

あなたにとっては賞賛になり、われわれには生命となることを

聞かせ教えてくれ

(訳注：原文にはこの後、3. から5. が欠けている)

6. 汝、甘い天の露よ

われわれの心を強くしてくれ

われわれの感覚がいつも愛に忠実であり

その中にいれるよう汝の愛を送ってくれ

嫉妬や争いであなたを悲しめたりさせずに

平和と喜びを漂わせ、与えてくれ

7. まったく神聖にそれを捧げよう

寿命を果たそう

おのれの精神を強め

うぬぼれや勤勉さへの意欲を意識させないでくれ

それは精神の死せる業だ

感覚を動かし働かそう

そして大地から始めるのだ

われわれは天の土になるのだ